

エジプト学研究第 24 号 2018 年

The Journal of Egyptian Studies Vol.24, 2018

目次

〈調査報告〉

2017 年 太陽の船プロジェクト 活動報告	黒河内宏昌・吉村作治	3
第 10 次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報 近藤二郎・吉村作治・菊地敬夫・柏木裕之・河合 望・高橋寿光・福田莉紗・米山由夏		11
第 26 次アブ・シール南丘陵遺跡調査概報 吉村作治・河合 望・近藤二郎・苅谷浩子・高橋寿光・米山由夏・石崎野々花・菅沼奏美		36
第 3 次北サッカー遺跡調査概報：踏査・測量・探査報告 河合 望・三井 猛・吉村作治・近藤二郎・柏木裕之・高橋寿光 梅田由子・米山由夏・石崎野々花・菅沼奏美		48
第 3 次北サッカー遺跡調査概報：試掘調査 河合 望・吉村作治・近藤二郎・柏木裕之・高橋寿光・米山由夏・石崎野々花・菅沼奏美		82
エジプト ダハシュール北遺跡調査報告―第 24 次調査― 吉村作治・矢澤 健・近藤二郎・柏木裕之・山崎世理愛・石崎野々花・有村元春		113
Intact Middle Kingdom Anthropoid Coffin of Sobekhat from Dahshur North: Discovery, Conservation and X-Ray Analysis Sakuji YOSHIMURA, Masahiro BABA, Ken YAZAWA, Richard JAESCHKE and Masayuki UDA		158

〈研究ノート〉

エジプト出土のミケーネ土器再考	有村元春	178
エジプト中王国・新王国時代におけるペクトラルの副葬にみられる変化： ダハシュール北遺跡出土資料を用いた考察	山崎世理愛	203

〈資料紹介〉

メロエの衰退をめぐる研究の現状と課題	坂本 翼	229
--------------------------	------------	-----

〈動向〉

スーダン考古学文献解題―我が国の学問的歩みを理解するために―	坂本 翼	242
--------------------------------------	------------	-----

The Journal of Egyptian Studies Vol.24, 2018

CONTENTS

Field Reports

- Report of the Activity in 2017, Project of the Solar Boat
.....Hiromasa KUROKOCHI and Sakuji YOSHIMURA 3
- Preliminary Report on the Tenth Season of the Work at al-Khokha Area
in the Theban Necropolis by the Waseda University Egyptian Expedition
.....Jiro KONDO, Sakuji YOSHIMURA, Takao KIKUCHI, Hiroyuki KASHIWAGI,
Nozomu KAWAI, Kazumitsu TAKAHASHI, Risa FUKUDA and Yuka YONEYAMA 11
- Preliminary Report on the Twenty-Sixth Season of the Work at Northwest Saqqara
by the Waseda Egyptian Expeditions
.....Sakuji YOSHIMURA, Nozomu KAWAI, Jiro KONDO, Hiroyuki KASHIWAGI, Hiroko KARIYA,
Kazumitsu TAKAHASHI, Yuka YONEYAMA, Nonoka ISHIZAKI and Kanami SUGANUMA 36
- Preliminary Report on the Third Season of Archaeological Survey at North Saqqara:
Archaeological Reconnaissance, Mapping and Geophysical Survey
.....Nozomu KAWAI, Takeshi MITSUI, Sakuji YOSHIMURA, Jiro KONDO, Hiroyuki KASHIWAGI,
Kazumitsu TAKAHASHI, Yuko UMEDA, Yuka YONEYAMA,
Nonoka ISHIZAKI and Kanami SUGANUMA 48
- Preliminary Report on the Third Season of Archaeological Survey at North Saqqara:
Archaeological Work
.....Nozomu KAWAI, Sakuji YOSHIMURA, Jiro KONDO, Hiroyuki KASHIWAGI,
Kazumitsu TAKAHASHI, Yuka YONEYAMA, Nonoka ISHIZAKI and Kanami SUGANUMA 82
- Preliminary Report on the Excavations at Dahshur North: Twenty-Fourth season
.....Sakuji YOSHIMURA, Ken YAZAWA, Jiro KONDO, Hiroyuki KASHIWAGI,
Seria YAMAZAKI, Nonoka ISHIZAKI and Motoharu ARIMURA 113
- Intact Middle Kingdom Anthropoid Coffin of Sobekhat from Dahshur North:
Discovery, Conservation and X-Ray Analysis
.....Sakuji YOSHIMURA, Masahiro BABA, Ken YAZAWA, Richard JAESCHKE and Masayuki UDA 158
- ### Articles
- Mycenaean pottery found in Egypt: RevisitedMotoharu ARIMURA 178
- Changes in the Use of Pectorals between the Middle Kingdom and the New Kingdom
.....Seria YAMAZAKI 203

エジプト出土のミケーネ土器再考

有村 元春*

Mycenaean Pottery found in Egypt: Revisited

Motoharu ARIMURA*

Abstract

Mycenaean pottery was widely distributed in late bronze age eastern Mediterranean. It circulated also in New Kingdom Egypt, but in contrast to other region, Levant and Cyprus, the Mycenaean pottery found in Egypt has been characterized as below; closed shapes predominate in the total assemblage, and most of them are decorated with simple motifs. Regarding this tendency, it has been often said that Egyptian wanted mainly oil and didn't perceive a value of pottery itself. However, the reasons of circulating a few open shapes in Egypt have not been fully studied. Even though quantitative analysis has conducted by some scholars recently, the materials used are insufficient and not comprehensive.

In this paper, through comparing with the Mycenaean pottery found in the Levant, I examined the character of the ones found in Egypt by quantitative analysis, with comprehensive materials, in terms of their shape and decoration.

Consequently, the character of Mycenaean pottery found in Egypt have been reconfirmed. Most of the shapes found in Egypt are closed, and stirrup jar and flask account for 90% of these. Hence, the assumption that this tendency occurred because of a demand for oil in Egypt is reasonable. Focusing on correlation between shapes and decorative motifs, it appeared that the trend of decoration secondarily occurred in association with the character of the assemblage of shapes in Egypt.

Also, as for a reason of scarcity of open shapes in Egypt, less than 10% in total, it can be suggested that the difference from the Levant might result from the shape of local pottery. Some scholars have pointed out that the close resemblance of the open shapes of Levantine pottery and Mycenaean pottery, and therefore open shapes of Mycenaean pottery became relatively popular in the region. Conversely, the shape of Egyptian local pottery has less resemblance to it. It is possible that the trend which very small amount of open shapes occur in Egypt was due to the Egyptian's unfamiliarity with the shapes of Mycenaean open pottery.

1. はじめに

後期青銅器時代の東地中海地域では、様々な勢力がひしめきあい、かつてないほど活発な交易活動が展開された。ウルブルンの沈没船が示すように、金属などの原材料が交易品として大切な役割を果たす一方で、香油やワインといった生産物もまた、重要な商材として広く流通した。これを裏付けるのが各地域で出土する輸入土器である。そして内容物を輸送するための土器の流通に伴い、内容物の輸送を目的としない実用品としての土器も普及することとなる。その最たる例として、この時期に主にギリシャで生産されたミケーネ土器を挙げることができる。ミケーネ土器は胎土がきめ細かく、器壁の薄い精緻な土器で（牧野 2004）、現在のシリア、スペイン、スーダン、イタリアを東西南北の限界地点として、地中海周辺地域の広範囲で出土が確認されている（Wijngaarden 2002: 3）。

* 早稲田大学大学院文学研究科修士課程

* Graduated Student, School of Letters, Arts and Sciences, Waseda University

ミケーネ土器の生産地は、エジプトやレヴァントで出土した資料の胎土分析によっていくつか同定されており、ギリシャ本土、アルゴス平野のベルバティ (Berbati) で、特に輸出用の土器生産が行われていたと想定されている (e.g. Mommsen et al. 1992)。それまでのクレタ島に替わって、ミケーネがエーゲ海地域の覇権を握ったことにより、東地中海全域でミケーネ土器の流通量が増加することが知られているものの、流通過程についてはギリシャから消費地へ直接交易によってもたらされたとする説や (Jung 2015: 253)、キプロス島などを經由してから、最終目的地へと輸送されたとする説などがあり (Merrillees 1973: 182; Kelder 2010a: 130)、依然としてその様相は不明瞭なままである¹⁾。

新王国時代のエジプトでもミケーネ土器が流通していたことが判明しているが、決定的な資料の不在から、当時のエジプトとミケーネの間で、どのような交易活動が行われてミケーネ土器がもたらされたのか、という点については明らかになっていない。しかしそのような状況においても、消費地における輸入土器の受容や消費といった観点からは十分に考察の余地がある。そしてこういった観点からの研究を蓄積し、他地域と相対化していくことにより、ひいては東地中海におけるミケーネ土器の流通の様相に迫っていくことができるのではないかと筆者は考えている。そこで、本稿ではエジプトにおけるミケーネ土器の出土傾向とその背景について考えていきたい。

2. 先行研究と本稿の目的

(1) 先行研究

エジプトで出土するミケーネ土器は、19世紀末に行われた一連の発掘によってその存在が認識され、特にアマルナで大量の土器片が出土したことから注目を集めることとなる。この発見当初から、絶対年代を確定させることができなかったギリシャとの交差編年への有用性が見出され、エジプト出土のミケーネ土器は現在に到るまで、ギリシャの編年研究に活用され続けている (Petrie 1890b; Hassler and Höflmayer 2008)。ギリシャの編年は、ミケーネ土器編年である後期ヘラディック (Late Helladic、以後 LH) I 期から III 期に区分されており、各時期はさらに細分されている (表 1)。主にアマルナ出土の資料を扱った V. ハンキー (Hankey) と、ディール・エル＝メディーナやグループを対象とした M. ベル (Bell) は、エジプトで出土するミケーネ土器の研究を精力的に行い、編年研究に寄与した (Warren and Hankey 1989; Bell 1991)。

エジプトで確認されている最古のミケーネ土器は LH I 期の土器片で、ケルマから出土している (Lacovara 1988)。その後、ハトシェプスト及びトトメス 3 世の治世頃から、LH II 期のミケーネ土器が流通し、アメンヘテプ 4 世治世と平行する LH IIIA2 期になると流通量が急激に増加する。そして、LH IIIB 期の後半になると流通量が減少する。レヴァントやキプロスとは異なり、エジプトでは LH IIIC 期の土器は流通しないと考えられていたが (Hankey 1993: 112)²⁾、近年になって複数の研究者によってエジプトにおける LH IIIC 期の土器の存在が指摘され始めている (Aston 1996b: 83; Mountjoy and Mommsen 2001: 154)。

定量的な分析が行われるようになる前から指摘されてきたエジプトでのミケーネ土器の出土傾向として、以下の 2 点を挙げることができる。第一に東地中海の他地域、レヴァントやキプロスなどと比べると閉口器形の土器が多く、開口器形が少ないという点である (Hankey 1993: 112)。次に、海洋文様や戦士像といった華美な「図像文様が描かれた土器 (Mycenaean pictorial pottery)」が皆無に等しく、単純な文様が描かれることが多い点である (Wijngaarden 2011: 237)。このような傾向から、当時のエジプトではミケーネ土器それ自体よりも、その内容物が重要であったと想定されてきた (Bell 1982: 143; Kelder 2010a: 134)。エジプトで出土するミケーネ土器の残滓分析は行われていないに等しいが³⁾、多くの研究者は香油やオリーブオイルなど⁴⁾が、閉口器形の土器 (特に、後述する鍔壺や巡礼壺) の内容物であったと考えている (Bell 1982:

146; Hankey 1995: 117)。

定量分析を用いた研究は近年になってようやく行われてきており、その例としてまず B. ジューダスの集成 (Judas 2010) を元に行なっている N. パパディミトリウによる論考 (Papadimitriou 2015) を挙げることができる。この論考が依拠している集成には、事実誤認や資料の見落としなど、問題点が散在しており、それに伴い、分析結果もやや信憑性に欠けるものとなっている。

もう一つは L. ブッシュネルの研究 (Bushnell 2016) である。この研究はエジプトからレヴァントにかけて分布している複数種類の輸入土器を定量的に比較分析している点で、従来にない画期的なものだといえる。しかしブッシュネルは特定の器形と遺跡を対象にして分析を行っており、後述するカンティールをはじめとしたデルタ地域から地中海沿岸地域の遺跡のほとんどが対象とされていないため、実情を捉えた分析がなされていないという点で問題を抱えている。

(2) 先行研究の問題点と本稿の目的

エジプトで出土するミケーネ土器は、交差編年への有用性から主に編年研究に活用されてきたが、出土傾向や特徴といった点については定量的な分析が行われることがないままに語られることが多かった。近年になって定量分析が行われるようになったが、エジプトで出土するミケーネ土器の包括的な分析は行われていないに等しい状況である。そして文様に関しては未だ分析がなされていない。また、エジプト特有の傾向が生じる背景については十分に考察されておらず、「エジプトでは内容物が重要であった」といった説明に止まっている。このような説明に至る過程での基礎研究の不十分さが、エジプトで出土するミケーネ土器研究における課題となっている。

本稿では以上の先行研究の課題を踏まえ、まずエジプトで出土するミケーネ土器の傾向を包括的な資料を用いた定量分析によって再検証する。そして後述する各項目に関してより詳細な検討を行い、そのような傾向が生じる背景について明らかにしていきたい。

3. 分析方法

(1) 対象資料

先述の通りジューダスが行なったエジプトで出土するミケーネ土器の集成には問題があるため、本稿ではシナイ半島、ヌビアを含むナイル川流域における 54 遺跡⁵⁾を対象とし、再集成を行った (図 1)。対象資料として、発掘調査報告書、展覧会図録、論文などに記載されているもの、欧米の博物館のオンラインカタログで確認できるものを扱った。ミケーネ土器の模造品に関しては本稿では扱わないこととし、遺跡ごとの資料の出典については、本稿末にまとめて提示した。

各分析の際に用いた資料は、確認できる最小個体数でカウントし、同一個体の可能性がある資料についてはまとめて一点としている。この際、判断基準としたのは器形、文様、胎土の記述である。時期決定を行う

表 1 LH 期とエジプトの編年
(Hornung et al. 2006, Manning 2010 を元に作成)

Table. 1 Chronology

1700B.C.		
1650	LH I	第二中間期
1600		
1550	LH IIA	トトメス 3 世 (1479-1425) ハトシェプスト (1479-1458)
1500		
1450	LH IIB	
1400	LH IIIA1	第 18 王朝
1350	LH IIIA2	
1300		アメンヘテブ 4 世 (1353-1336)
1250	LH IIIB	ホルエムヘブ (1319-1292)
1200		ラメセス 2 世 (1279-1213)
1150		第 19 王朝
1100		セティ 2 世 (1202-1200)
1050	LH IIIC	ラメセス 3 世 (1187-1157)
		第 20 王朝



図1 ミケーネ土器及びミケーネ土器模造品出土遺跡（筆者作成）

Fig. 1 The sites which Mycenaean pottery was found

にあたっては、マウントジョイの著作 (Mountjoy 1986) を参照した。

また、エジプトでの傾向を捉えるためには、他地域との相対化が不可欠な作業となるため、本稿では比較対象として、レヴァント出土の資料を扱って分析を行なっていくこととする。レヴァントで出土するミケーネ土器に関しては、A. レオナルドによる集成 (Leonard 1994)、及び J. ワインハールデンによる研究 (Wijngaarden 2002) を用いた。

以上の資料をもとに、エジプトで出土するミケーネ土器の器形と描かれる文様について、レヴァントで出土した資料との比較をしながら、順に分析を行なっていく。

(2) 器形と文様の分類

ミケーネ土器の器形と文様の分類を行なった A. フルマーク (Furumark) は、器形を 336 種類に細分している (Furumark 1941)。ミケーネ土器研究において、フルマークによる分類を用いて器形に言及することが一般的であるが、エジプトで出土するミケーネ土器の器形の分析を行うにあたって、あまりに細かな分類を用いると傾向を捉えづらくなると考えられる。そこで、本稿では図 2 のような器形分類を行った。想定されている各器形の機能は、レオナルドとワインハールデンの研究を参考にした (Leonard 1981; Wijngaarden 2002)。日本語での名称について、「鍔壺」や「巡礼壺」のように慣例的に用いられているものに関しては、そのまま採用している。

また、先行研究では開口・閉口器形といった語がしばしば用いられてきたが、明確な基準によって、その

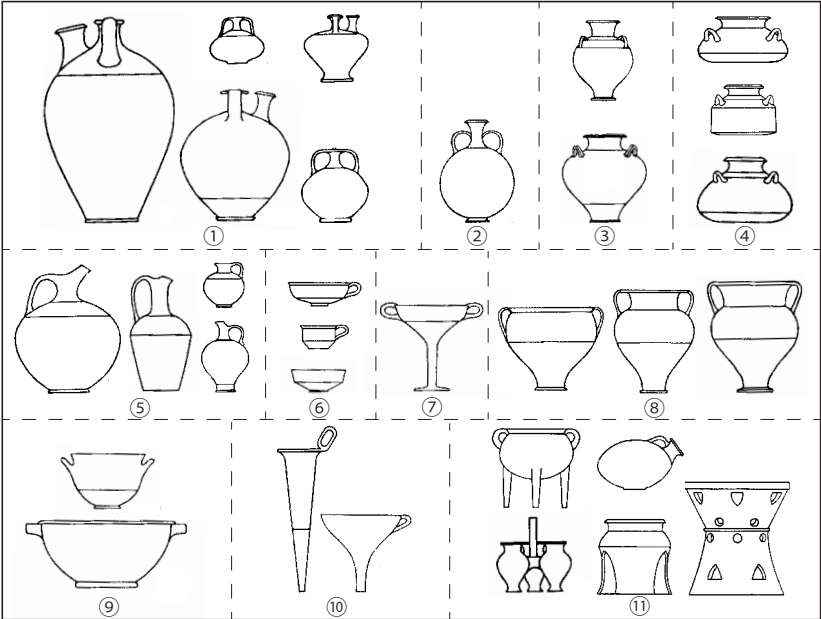
			
器形	開閉	機能	内容物
①鍔壺	閉口	輸送、貯蔵	油 (液体)
②巡礼壺			油 (固体)
③三把手長胴壺		輸送、貯蔵	固形物
④三把手扁平壺			液体
⑤片把手壺	開口	日用雑器	
⑥坏	開口	日用雑器	
⑦高坏			
⑧甕			
⑨鉢			
⑩底部穿孔土器			
⑪その他			

図 2 器形分類と各器形の機能 (Mountjoy 1986, fig.271-283 のフルマークによって細分類された器形の一覧図及び Leonard 1981, Wijngaarden2002 を元に作成)

Fig. 2 Shape classification and estimated function of each shape

区別がなされてきたわけではない。そのため、本稿では B. アストン (Aston) が設定した開口指数 (aperture index, AI) を開閉の判断基準とする。開口指数は口径／最大径×100 によって求めることができ、この数値が 140 よりも大きければ閉口器形とし、それ以下であれば開口器形と呼称する (Aston 1994: 179-181)。

文様に関しては、フルマークが行なった分類をそのまま用いて分析を行った (Furumark 1941)。フルマークは文様を 78 種類に分類しており、ミケーネ土器に描かれた文様を記述する際、それぞれ 1～78 までの番号の前に FM (Furumark Motif の略) をつけるのが通例となっているため、本稿でもそれに従うこととする。

4. 分析

(1) 器形

各遺跡で出土している器形と、その数量を示したのが表 2 である。まずは地域的な出土傾向についてみていきたい。第一に、それぞれアメンヘテプ 4 世 治世時、ラメセス朝の王都であるアマルナ、カンティールでは量の多寡はあるものの、器形のバリエーションに富んでいることが分かる。そして、王都で見られる器形のバリエーションを他の遺跡が超えることはない。各遺跡で確認される器形の組成から、地域ごとの傾向を見いだすのは難しいが、東地中海沿岸の遺跡から開口器形が出土し、アマルナを除くとグループよりも南で出土するミケーネ土器の器形は、閉口器形に限られている点を指摘できる。また、明瞭な傾向ではないものの、地中海沿岸から遠隔地になるにつれ、確認される器形のバリエーションが減少している。

次に、エジプトとレヴァントで出土しているミケーネ土器の器形組成を比較した図 3 から分かるように、エジプトでは鐙壺が圧倒的に多く、巡礼壺が次に多く出土している。三把手長胴壺、三把手扁平壺、片把手壺の出土量は多くはないが、同じ程度出土している。以上は全て閉口器形であり、全体の 90% を占める。そして閉口器形の内 80% 以上を鐙壺と巡礼壺が占めている。一方で坏、高坏、甕、鉢、底部穿孔土器といった開口器形の出土量は全体の 10% に満たず、ごくわずかである。エジプトとレヴァントの両地域とも、閉口器形の占める割合が大きいという点では共通しているが、開口器形の土器も全体の 40% 近く流通していたレヴァント地域に対し、エジプトでの開口器形の流通量は極めて少ないことがわかる。したがって、「他地域と比べ、器形組成の中で閉口器形の割合が大多数を占める」という、エジプトで出土するミケーネ土器の特徴を追認することができる。

さらに、ミケーネ土器編年に着目し、時期ごとの出土遺跡と出土量、器形組成を示したのが図 4 である⁶⁾。第 2 中間期からトトメス 4 世治世頃と平行する LH I-III A1 期の土器は出土量が少ないが、分布は広範囲に渡り、点在している。そして器形は三把手扁平壺がもっとも多く次に片把手壺、坏と続く。LH III A2 期、特にその後半期になると出土量が急増し、アマルナ以外では、サッカラやテル・エル＝ボルグで比較的多く出土している。この時期の器形組成では鐙壺と巡礼壺が大部分を占めるようになり、ヌビアでの流通量も増加する。LH III B 期には、カンティールから多く出土するようになる。そして以前の時期には出土の痕跡が希薄であったデルタ地域で出土が確認され、ファイユーム以北での出土量が増加する。巡礼壺の量は減少し、鐙壺が器形組成全体の 75 パーセント以上を占めるようになる。また、依然としてヌビアでも流通が継続しており、エジプトにおける分布の範囲は LH III A2 期とほぼ変わっていない。

(2) 文様

次に文様に関して分析を行っていく。エジプトで確認されている文様と、それが描かれている土器の数量を図 5 に示した⁷⁾。この結果、エジプトでは FM18、19、64、L が描かれた土器が多いことが分かった。その他の文様に関しては FM46、60 を除くと点数はそれぞれ一桁にとどまる。花を表現した FM18 以外は極め

表2 各遺跡で確認されている器形と数量（筆者作成）
 （括弧内の数字は土器片数を表し、括弧外の数を確認できる最小個体数である。）

Table. 2 Shapes and quantity of Mycenaean pottery on each site

遺跡番号	①鎗壺	②巡礼壺	③長胴	④扁平	⑤片把手	⑥坏	⑦高坏	⑧甕	⑨鉢	⑩穿孔	⑪その他	不明	計
1	5	1			4								10
2	1 (4)					3			1			3(9)	8 (17)
3	1												1
4	3 (8)	7	1			1							12 (17)
5												数量不明	
6												数量不明	
7	1												1
8	1												1
9												1	1
10	1												1
11	32 (48)	3	3(7)	1	4 (5)	2	1	2	1	1	1	4 (6)	55 (78)
12	3 (6)	1											4 (7)
13								1					1
14	1												1
15												数量不明	
16												数量不明	
17	3(6)	1 (2)											4 (8)
18	1												1
19						1							1
20	1											5 (36)	6 (37)
21	28 (41)	3	1	4		2	1					2 (4)	41 (56)
22	3	1											4
23	3												3
24	3	1											4
25												数量不明	
26												数量不明	
27	39 (45)	4		3	2					1	1		50 (56)
28	4				1								5
29		1											1
30												数量不明	
31	62 (283)	79 (450)	20 (45)	18 (28)	4 (5)	4	3		2	1		28 (330)	221 (1151)
32	2												2
33	2				1								3
34	4												4
35	3	1											4
36												数量不明	
37	1												1
38	14	2	1		1								18
39												1	1
40	5 (6)												5 (6)
41	1												1
42												数量不明	
43												数量不明	
44	2												2
45												数量不明	
46	4 (5)	1										1	6 (7)
47	1 (2)	1	1										3 (4)
48	3 (4)	1										3 (7)	7 (12)
49	2												2
50	2 (3)			1									3 (4)
51		1										1 (3)	2 (4)
52	1												1
53												1	1
54		1											1
出土地不明	31 (32)	4	1	11	4					1		2 (3)	54 (56)
計	274 (550)	114 (486)	28 (57)	38 (48)	21 (23)	13	5	3	4	4	2	52 (402)	558 (1597)

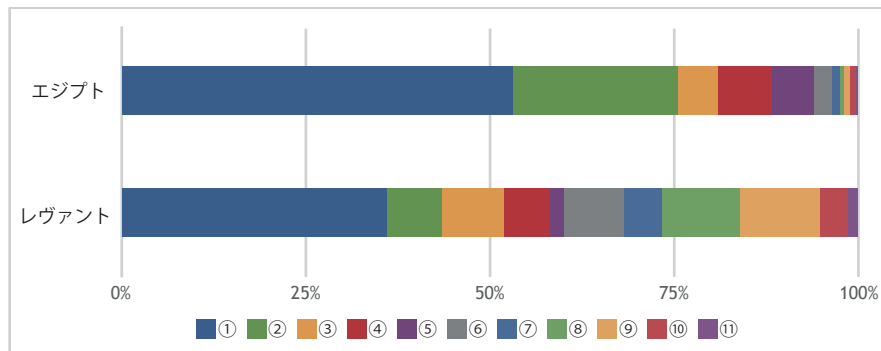


図3 両地域における各器形の比率（筆者作成）

Fig. 3 Comparison of pottery shape frequencies between Egypt and the Levant

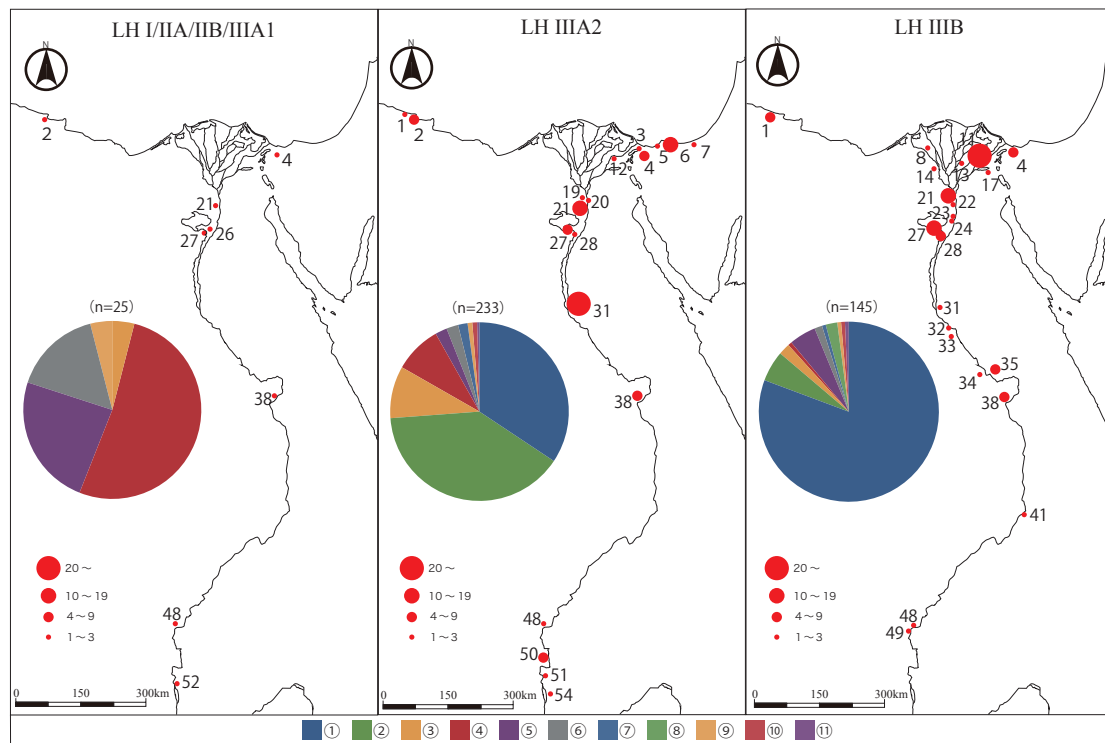


図4 時期ごとの分布と器形組成（筆者作成）

Fig. 4 Distribution and assemblage of shapes in each phase

て単純な文様であることが分かる（図6）。図像文様が描かれたミケーネ土器は、テル・エル＝ミクダーム出土の土器片一点のみしかエジプトでは確認されていない（Vermeule and Karageorghis 1984: 42）。

図7はエジプトとレヴァントで確認される各文様の量を比較したもので、文様が特定されていても器形が不明な資料に関しては除外してある。エジプトで出土が確認されていない、もしくは極めて少ないのに対し、レヴァント地域で多く確認されている文様として、戦士像であるFM1、馬の図像であるFM2、23、27、戦車を描いたFM39、波線のFM53、中心の文様が両側の縦線に挟まれるFM75を挙げることができる（図8）。

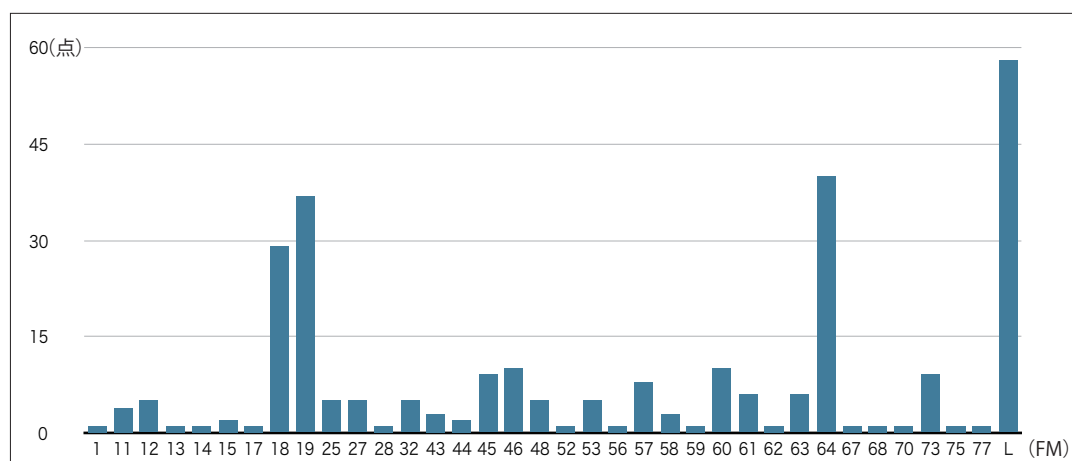


図5 エジプトにおける各文様が描かれた土器の出土量（筆者作成）

Fig. 5 Quantity of each motif in Egypt

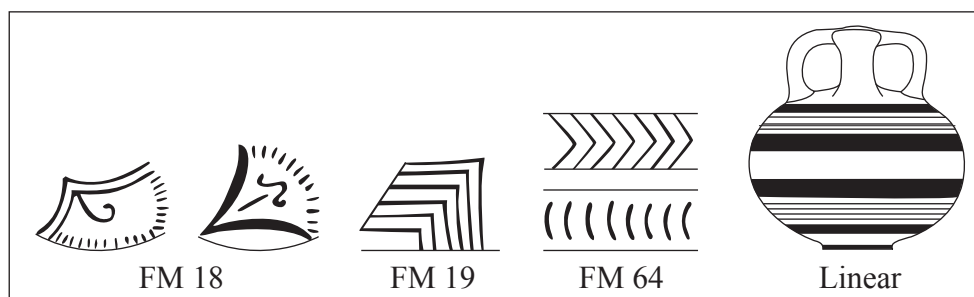


図6 エジプトで多く確認されている文様（Furumark 1941a: fig.45,47,69 を元に作成）

Fig. 6 Motifs which frequently occur in Egypt

また、上記の文様よりは少ないものの、エジプトで全く確認されていない文様には魚を表した FM20、蛸文様の FM21、半円が重層的に連なる FM42、渦巻き状の FM49、渦巻文様が中心の文様に左右対称に位置する FM50 がある。FM53 を除くと、エジプトで確認されていないのに対し、レヴァント地域で確認される文様には、戦士文様や動物文様、海洋文様、一単位が複雑な文様が多いことがわかる。このように他地域と比べて、エジプトで出土しているミケーネ土器に描かれる文様は単純なものが多いという、従来から指摘されてきた傾向を再確認できる。

では、このような傾向は意図的な選択、つまり当時のエジプト人が単純な文様を嗜好した結果生じたのだろうか。それについて明らかにするために、次に器形と文様の相関関係に着目してみたい。表3では、それぞれエジプトとレヴァント地域における、各文様とそれが描かれた器形及びその数量を示した⁸⁾。まずこの表からは、エジプトで多く見られるような FM18、19、64、L といった文様は、エジプト、レヴァントの両地域で甕壺や巡礼壺に描かれることが多いことが分かる。一方で、図像文様をはじめとするエジプトでほとんど確認されていない複雑な文様は高杯や甕、鉢など開口器形の土器に描かれることが多い。つまり、単純な文様はエジプトで多く出土する器形（甕壺、巡礼壺）との相関関係が強く、複雑な文様に関しては、エジプトでほとんど出土しない開口器形との相関関係が強い。したがって、この結果からエジプトで確認される文様の傾向は、当時のエジプト人が意図的に単純な文様を選択したというよりも、甕壺や巡礼壺が大部分を

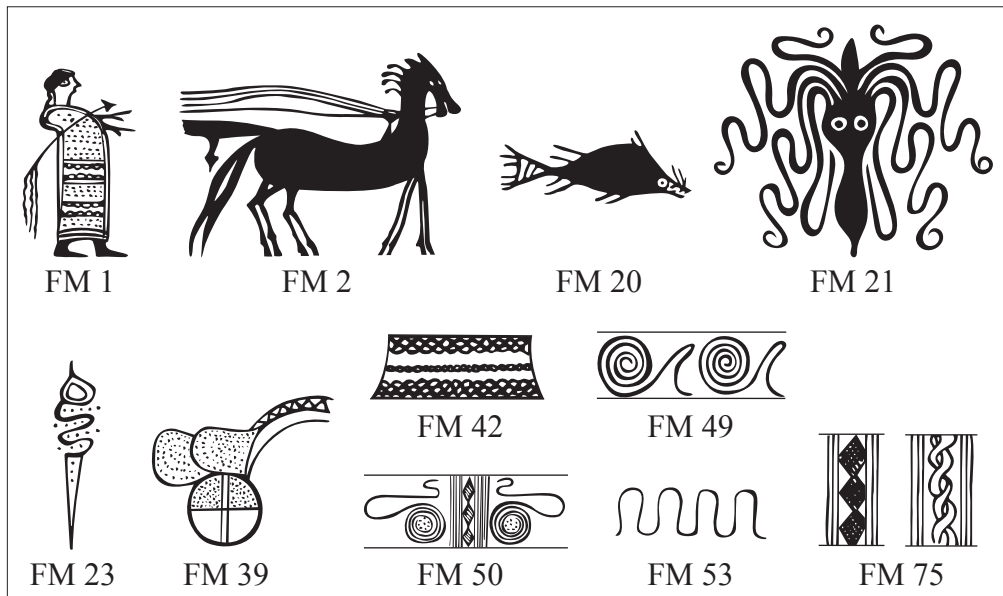


図8 エジプトでほぼ出土しないレヴァント地域に特徴的な文様
(Furumark 1941 fig.25,26,48,49,51,53,56,57,62,65 を元に作成)

Fig. 8 Motifs which are hardly found in Egypt

占め開口器形の土器がごくわずかであるという、エジプトにおけるミケーネ土器の器形組成が大きく関係していることが判明した。

5. 考察

(1) 器形と文様の傾向について

まず、上記の分析結果からエジプトで出土するミケーネ土器には、レヴァントと比べ、圧倒的に閉口器形が多いことが再確認された。しかし、ここで注意しておかねばならないのは、土器と内容物を分離して考えなくてはならないということである。つまり、当時のエジプトでは閉口器形の需要が多かったというよりも、従来から指摘されている通り、内容物の入手を第一目的としていたと考えてよいだろう。その結果として、閉口器形の土器が多く出土しているのである。閉口器形の中でも特に罈壺と巡礼壺が多いことから、液体性の油の需要が高かったといえる。そして、文様と器形の相関関係の分析から明らかになったように、エジプトで確認されている文様には、単純なものが多いという傾向は、開口器形の土器よりも内容物を入手することを重視したことによって、副次的なものとして生じたといえることができる。

古代エジプトでは油の需要が多く、様々な場面で使用された。文字記録を参照すると、新王国時代には周辺地域から多種多様な油を輸入していたことが分かる。例えばアマルナ文書の中には、ミッタニから数種類の油が送られていたことが記録されているものがある (Moran 1992: 80)。また、アナスタシ・パピルス IV では、王の到着に備え、そのために必要なものとして種々の物品に加え、様々な外国由来の油が示されている (Gardiner 1937: 52)⁹⁾。さらに、カナーン壺に記されたヒエラティックからは、レヴァントからオリーブ油などを輸入していたことも判明しており (Bavay 2015)、こういった例は枚挙に遑がない。このように、多様な油の需要があったエジプトにおいて、それを特定する単語は判明していないが、罈壺を始めとする閉口器形のミケーネ土器に収められていた油にも、同様に価値を見出していたと考えても問題はないだろう。

しかし、エジプトで出土するミケーネ土器では閉口器形が圧倒的に多く、開口器形がごくわずかであるという傾向が、エジプトにおける発掘調査のあり方に起因していると指摘する研究者もいる。つまりエジプトでは墓地の調査が中心であり、居住域の調査があまり進んでいないため、ミケーネ土器の出土量が他地域よりも少なく、開口器形の確認例が少ないのではないかと、ということである (Papadimitriou 2013: 107)。たしかに、カンティール、アマルナ、ディール・エル＝メディーナなどにおける居住域からは、他の遺跡よりも比較的多いミケーネ土器の出土例が確認されており、今後の居住域での調査によってミケーネ土器の出土例が増加し、開口器形の土器も出土する可能性はある。しかし、カンティールやアマルナでは、開口器形も出土しているものの、閉口器形が全体の大多数を占めている。また、ディール・エル＝メディーナでも、ほとんどが未刊行資料ではあるが、資料調査を行なったベルによると閉口器形の土器しか確認されていない (Bell 1982: 153)。レヴァントでは、居住域から開口器形の土器が多く出土する例があるが、今までのところ、エジプトにおける居住域の遺跡においてそのような傾向は見られず、どの遺跡でも閉口器形の土器が圧倒的に多く出土しているのである。したがって、将来的にエジプトで出土する開口器形のミケーネ土器の絶対数が増加することがあっても、器形組成における相対的な量が極めて少ないという様相に変化はないと考えられる。

(2) 開口器形の流通が限られた要因

内容物の需要が高かったため、閉口器形、特に鍔壺と巡礼壺の量が多いことが再確認されたが、なぜエジプトでは開口器形の土器の流通量が極めて少ないのか。開口器形の絶対数がごくわずかであるこの状況において、「エジプトで見られる器形の傾向は内容物を重視した結果である」という説明ではまだ不十分であろう。

では反対に、なぜレヴァントで開口器形の土器も流通したのだろうか。後者の要因として、複数の研究者によって指摘されているのが、レヴァント在地の土器とミケーネ土器との器形における類似性である (Jung 2015; Yasur-Landau et al. 2014)。レヴァントの在地土器の器形と、ミケーネ土器の器形が類似しており、質に関してはミケーネ土器の方が格段に高かったため、在地土器の上位互換品として用いるというような受容がなされた。その結果としてレヴァントでは、割合としては閉口器形を下回るものの、開口器形のミケーネ土器も流通していたと考えられているのである (図9)。これらのミケーネ土器と類似する器形は中期青銅器時代からレヴァントで流通しており、後期青銅器時代におけるミケーネ土器の大規模な流通に伴い、それを模造するという形で在地土器のバリエーションに採用されたと想定することは難しい。

一方、エジプト新王国時代の在地土器には、開口器形のミケーネ土器と類似する器形はほぼない (図10)¹⁰⁾。在地土器との類似性と実用品的な器形の需要が関係しているとするならば、開口器形のミケーネ土器が少ないのは妥当だと言える¹¹⁾。

エジプトにおいて内容物の輸送を前提としない(土器それ自体の実用性が重要な)開口器形のミケーネ土器の需要が低かった要因の一つとして、在地土器との類似度に基づく実用性が乏しく、レヴァントと比べ受容する素地がなかった点を挙げることができるのではないだろうか。

6. まとめ

エジプトでは内容物は重視する一方で、実用品的な器形はほとんど受け入れない、といった選択が行われた結果、内容物を輸送したと考えられている閉口器形の土器、特に鍔壺や巡礼壺が多く流通した一方で、レヴァントとは異なり開口器形の土器の数量が極めて限定されるという様相を呈するに至ったことが追認され

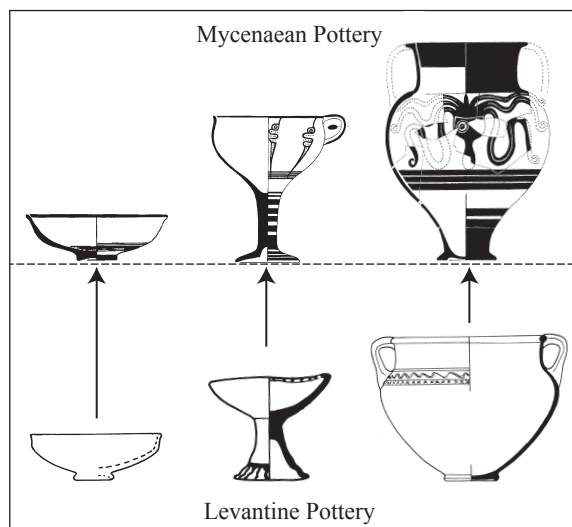


図9 ミケーネ土器とレヴァント在地土器との類似性
(Amiran 1970 pl.29:5, 39:12, 40:12; Yon et al. 2000 fig.8:55, 23:371, 24:397 を元に作成)

Fig. 9 Resemblance of Mycenaean and Levantine pottery

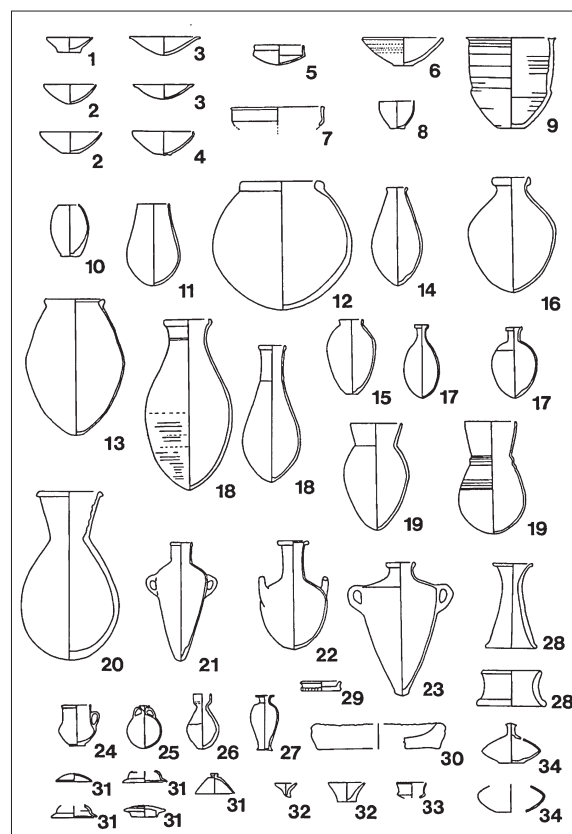


図10 新王国時代の土器 (23, 34 を除く)
(斎藤 1999, 図1)

Fig.10 Egyptian pottery in New Kingdom

た。そして、このような選択に伴い、エジプトで出土するミケーネ土器に描かれた文様には、単純なものが多いという傾向が生じることとなった。実用品的な開口器形をほとんど受容しなかった一因としては、レヴァントでの例を参考にした結果、ミケーネ土器とエジプト新王国時代に流通していた在地土器との類似性が関係している可能性が示唆された。つまり、ミケーネ土器とエジプトの在地土器との類似性が低かったことを、開口器形の土器が受容されなかった要因の一つとして想定することができるのではないだろうか。

J. ケルダー（Kelder）が主張するように、特に王都から多数出土するようになる LH IIIA2 期から LH IIIB 期にかけては、ミケーネ土器の入手に王族の強い関心があったと考えてよいだろう（Kelder 2010b）。エジプトでは華美な開口器形の土器を所持し、利用することよりも、土器の内容物を多く利用することが重視されており、それがある種ステータスとなっていたのではないだろうか。

生産地からエジプトに至るまでの流通過程において、「エジプト用のミケーネ土器」の選択がどの段階で行われていたのかは未だ不明である。直接交易だとしたら輸出される時点で、仲介者や商人のような存在によってもたらされる間接的な交易だとしたら中継地でそういった判断がなされたのであろう。いずれにせよ、この選択の背景には、当時のエジプトではレヴァントと比べると開口器形の土器の需要が極端に少ないという認識があったと考えられる。

7. おわりに

本稿では、包括的な資料を用いた定量分析を行い、ナイル川流域で出土するミケーネ土器の器形、文様に関して詳細な検討を行ない、これまで指摘されてきた傾向を実証的に裏付けることができた。しかし、土器自体に見られる傾向を中心に論じたため、特に器形の分析で明らかになったエジプトにおける空間的分布、すなわち流通の側面に関する傾向については解釈を留保している。この点に関してはこれからの検討課題としたい。

今後このような輸入土器を対象に研究を行って行く際には、パパディミトリウが主張するように、輸入土器だけでなく、それ以外の研究データを統合し、各地域の社会体制の違いを勘案した研究を行うべきであろう（Papadimitriou 2013: 127-128）。本稿ではエジプトとの比較資料としてレヴァントで出土したミケーネ土器を一括りにして検討を行なったが、レヴァントで出土するミケーネ土器に関しては、遺跡ごとの受容、消費戦略を明らかにした研究も既に行われている（Wijngaarden 2002; Bell 2006）。今後はエジプトにおいても、こういった点から細かく検討していくことが必要になるといえる。

ものが流通するということは当然受容する側が存在する。流通を考える際にはまず、ものと受容する側についての議論が不可欠であり、特に生産・流通・消費過程のうち、前者二つが未だ不明瞭である後期青銅器時代の交易活動の様相を明らかにするには、消費の側面に力点を置いた研究が重要となってくるのではないだろうか。

謝辞

本稿を草するにあたり早稲田大学文学学術院の近藤二郎教授から多大なご指導を賜りました。またエジプト学研究所の諸先輩方より数多くのご教示をいただきました。そして査読を引き受けてくださった先生方からは大変貴重なご指摘を賜りました。末筆ではありますが、ここに記して深く感謝いたします。

註

- 1) 例えばエジプトのグループでは楔形文字が刻まれているミケーネ土器が出土したとされているが（Stubbings

- 1951)、実際にこれが楔形文字であるのかはわかっておらず (Åström and Anson 2007: 49)、流通の様相は判然としない。
- 2) LH IIIC 期と平行する第20王朝のラメセス三世王墓に描かれた壁画はミケーネ土器が図像として表現された唯一の例であり、これが LH IIIC 期の土器であるのか、それとも模造品なのかという点について多くの議論がなされてきた (Aston 1989: 17-18)。
 - 3) 化学的な分析は行われていないが、出土したミケーネ土器の内容物に言及したものとして以下のようなものがある。まずは、ディール・エル＝メディーナで出土した鍔壺で、これを A. ルーカス (Lucas) が実見したところ、香油らしい樹脂が確認されたという (Bell 1982: 146)。また、パラピーシュの発掘調査を行った G. ウェインライト (Wainwright) によると、この遺跡で出土したミケーネ土器の模造品から香油の残滓が検出されたとしている (Wainwright 1920: 66)。
 - 4) 具体的にどのような油であるか特定できないため、本稿では以後「油」という表現に留めることとする。
 - 5) テーベ東岸、西岸の遺跡 (カルナック、ディール・エル＝メディーナ、ドゥラ・アブ・エル＝ナガ、アル＝コーカ、シェイク・アブド・アル＝クルナ、カスル・エル＝アゲーズ) は「テーベ」としてまとめて扱っている。
 - 6) ここで述べておかなければならないこととして、まず、伝世品の問題がある。明らかに伝世していると判断できる例を二例挙げることができる。一つ目はサッカラの例で、ホルエムヘブのトゥームチャベルに埋葬されたラメセス朝の王女の副葬品として、100 年程度の時間差がある LH IIIA2 期の鍔壺と巡礼壺が用いられた。 (Warren and Hankey 1989: 151)。二つ目はテーベのピネジエム 1 世の孫であるジェドコンスエフアネク墓で出土した、LH IIIA2 もしくは IIIB1 期の鍔壺で、300 年以上のタイムラグがある (Stubblings 1951: 93; Kitchen 1986: 424)。攪乱によって古いミケーネ土器片が、後世に年代づけられる層で発見されるケースはいくつかあるが (e.g. Petrie 1909: pl.xxii: 4)、明らかに伝世品と判断できるミケーネ土器が出土することはそう多くないため、ここでは伝世の問題には立ち入らず、「どの時期の土器が、どの遺跡で、どれだけ出土しているか」について分析する。また、時期が曖昧な資料は含めていないため、実際には出土しているが図には示されていない遺跡があること、LH IIIC 期の土器に関しては出土遺跡や出土量など実態が不明瞭な点が多いため、LH IIIB 期までを分析の対象としたこと、の二点を断っておきたい。
 - 7) 図5の「L (Linear の略)」は、文様が描かれておらず、土器の胴部、肩部を一周する平行線のみが施されているものを表す。
 - 8) 複数の文様が描かれているものに関しては、それぞれの文様ごとに一点とカウントしているため、この表における器形の総量は、両地域におけるミケーネ土器の総出土量とは異なる。
 - 9) この資料は書記学校で書かれた所謂「モデルレター」であり、記述が全面的に事実であるかどうかについては明らかではない。しかし、王が到着するのに備え諸外国の油を用意する必要がある、という認識があったと考えることもできるのではないだろうか。
 - 10) 新王国時代のエジプト在地土器にはレヴァント地域の土器と類似した器形も存在しているが、流通量は極めて少ない。
 - 11) 極端にいうと、在地土器のアセンブリッジの中でエジプトのように丸底が主であるか、レヴァント地域のように台付、平底が主か、といった点も大きく影響しているのかもしれない。なぜなら、ミケーネ土器の器形はほぼ台付き、もしくは平底だからである。

参考文献

Amiran, R.

1970 *Ancient Pottery of the Holy Land: From Its Beginnings in the Neolithic Period to the End of the Iron Age*, Rutgers.
Anthes, R.

1959 *Mit Rahineh* 1955. Philadelphia.

1965 *Mit Rahineh* 1956. Philadelphia.

Aston, B.G.

1994 *Ancient Egyptian Stone Vessels: Materials and Forms*, Heidelberg.

2005 "Section 6: The Pottery", in Raven, M.J., *The Tomb of Pay and Raia at Saqqara*. London, pp.94-128.

2011 "Chapter VI: The Pottery", in Raven, M.J., Verschoor, V., Vugts, M and Walsem, R. (eds.), *The Memphite Tomb of Horemheb: Commander in Chief of Tutankhamun V*, Turnhout, pp.191-303.

- 2012 “Chapter VII: The Pottery”, in Schneider, H. *The Tomb of Iniua in the New Kingdom Necropolis of Memphis at Saqqara*, Turnhout, pp.139-217.
- Aston, D.A.
- 1989 “Qantir/Piramsse-Nord – Pottery Report 1988”, *Göttiger Miszellen* 113, pp.7-32.
- 1991 “Section 5: Pottery”, in Raven, M.J., *The Tomb of Iurudef: A Memphite Official in the Reign of Ramesses II*, Leiden and London, pp.47-54.
- 1996a “Tell Hebwa IV – Preliminary Report on the Pottery”, *Ägypten und Levante* 6, pp.179-197.
- 1996b *Egyptian Pottery of the Late New Kingdom and Third Intermediate Period(Twelfth – Seventh Centuries BC): Tentative Footsteps in a Forbidden Terrain*, Heidelberg.
- 1997 “Section D: The Pottery”, in Martin, G.T., *The Tomb of Tia and Tia: A Royal Monument of the Ramesside Period in the Memphite Necropolis*, London, pp.83-102.
- 1999 *Elephantine XIX: Pottery from the Late New Kingdom to the Early Ptolemaic Period*, Mainz am Rhein.
- 2001 “The Pottery from H/VI Süd Strata a and b: Preliminary Report”, *Ägypten und Levante* 11, pp.167-196.
- Aston, D.A. and Aston, B.G.
- 2001 “Section H: The Pottery”, in Martin, G.T., van Dijk, J., Raven, M.J., Aston, B.G., Aston, D.A., Strouhal, E. and Horácková, L., *The Tomb of Three Memphite Officials, Ramose, Kha'y and Pabes*, London, pp.50-61.
- Åström, P. and Anson, D.
- 2007 “A Base-Ring I Juglet from Memphis and Mycenaean Sherds from Amarna”, *Archaeologia Cypria* 5, pp.41-55.
- Ayrton, E.R., Currelly, C.T. and Weigall, A.E.P.
- 1904 *Abydos III*, London
- Bavay, L.
- 2015 “Canaanite Jar and Jar Sealings from Deir el-Medina: Scattered Evidence of Egypt's Economic Relations with Levant during the New Kingdom”, in Edel, B. and Pruzsinszky, R. (eds.), *Policies of Exchange: Political Systems and Modes of Interaction in the Aegean and Near East in the 2nd Millennium B.C.E.*, Vienna, pp.129-140.
- Bell, C.
- 2006 *The Evolution of Long Distance Trading Relationships across the LBA/Iron Age Transition on the Northern Levantine Coast*, Oxford.
- Bell, M. R.
- 1982 “Preliminary Report on the Mycenaean Pottery from Deir el-Medina (1979-1980)”, *Annales du Service des antiquités de l'Égypte* 68, pp.143-164
- 1985 “Gurob Tomb 605 and Mycenaean Chronology”, in Posener-Kriéger, P. (ed.), *Mélanges Gamal Eddin Mokhtar*, Cairo, pp.61-86.
- 1991 *The Tutankhamun Burnt Group from Gurob, Egypt: Bases for the Absolute Chronology of LH III A and B*, Unpublished dissertation, University of Pennsylvania.
- Bietak, M.
- 1975 *Der Fundort im Rahmen einer archäologischen Untersuchung über das ägyptische Ostdelta. Tell el Da'ba 2*, Vienna.
- von Bissing, F.W.
- 1899 “Funde und Erwerbungen in und aus Ägypten 1897 – 1898/99”, *Archäologischer Anzeiger* 14, pp.57-59.
- Blinkenberg, C. and Johansen, K.F.
- 1927 *Corpus Vasorum Antiquorum Denmark Copenhagen: Musée National II*, Paris.
- Bourriau, J.
- 1981 *Umm el – Ga'ab. Pottery from the Nile Valley before the Arab Conquest*, Cambridge.
- Bourriau, J. and Aston, D.
- 1985 “Section 5: The Pottery”, in Martin, G.T., *The Tomb-Chapels of Paser and Ra'ia at Saqqâra*, London, pp.32-55.
- Bourriau, J., Aston, D., Raven, M.J. and Walsem, R.

- 2005 *The Memphite Tomb of Horemheb Commander-in-Chief of Tutankhamun. Vol.III: The New Kingdom Pottery*, London.
- Brunton, G. and Engelbach, R.
- 1927 *Gurob*, London.
- Buchholz, H.Z.
- 1974 “Ägäische Funde und Kultureinflüsse in den Randgebieten des Mittelmeers. Forschungsbericht über Ausgrabungen und Neufunde, 1960-1970”, *Archäologischer Anzeiger* 89, pp.325-483.
- Budka, J.
- 2013 *Sai Island, the Aegean and the Levant*, <http://acrossborders.oeaw.ac.at/sai-island-the-aegean-and-the-levant/>, 2016年9月20日閲覧
- Bushnell, L.
- 2016 *Precious Commodities : The Socio-economic Implications of the Distribution of Juglets in the Eastern Mediterranean during the Middle and Late Bronze Age*, Oxford.
- Catling, H.W., Richards, E.E. and Blin-Stoyle, A.E.
- 1963 “Correlations between Composition and Provenance of Mycenaean and Minoan Pottery”, *The Annual of the British School at Athens* 58, pp.94-115.
- Davies, N. de G.
- 1913 *Five Theban Tombs*, London.
- Donadoni, A.M., Leospo, E., D’ Amicone, E., Roccati, A. and Donadoni, S.
- 1993 *Il Museo Egizio di Torino. Guida alla Lettura di Una Civiltà*, Novara.
- Dusmore, A.
- 2014 “Chapter VII: Pottery”, in Raven, M.J. and van Walsem, R., *The Tomb of Meryneith at Saqqara*, Turnhout, pp.257-293.
- Edgar, P.M.C.C
- 1911 *Catalogue Général des Antiquités Égyptiennes du Musée du Caire: Greek Vases*, Le Caire.
- Emery, W.B., Smith, H.S. and Millard, A.
- 1979 *The Fortress of Buhen: The Archaeological Report*, London.
- Engelbach, R.
- 1915 *Riqqeh and Memphis IV*, London.
- Firth, C.M.
- 1927 *The Archaeological Survey of Nubia. Report for 1910-1911*, Cairo.
- Firth, C. and Gunn, B.
- 1926 *Excavations at Saqqara. Teti Pyramid Cemeteries I-II*, Cairo.
- Forsdyke, E.J.
- 1925 *Catalogue of the Greek and Etruscan Vases in the British Museum. Vol. I. Part I. Prehistoric Aegean Pottery*, London.
- Frankfort, H. and Pendlebury, J.D.S.
- 1933 *The City of Akhenaten. Part II*, London.
- Freed, R.E. and Markowitz, Y.J.
- 1999 *Pharaohs of the Sun: Akhenaten, Nefertiti, Tutankhamen*, London.
- French, P.
- 2013 *The Anubieion at Saqqara III: Pottery from the Archaic to the Third Intermediate Period*, London.
- Furumark, A.
- 1941 *Mycenaean Pottery: Analysis and Classification*. Stockholm.

Furtwängler, A and Loeschcke, G

1886 *Mykenische Vasen: vorhellenisch Thongefässe aus dem Gebiete des Mittelmeeres*, Berlin.

Gardiner, A.

1937 *Late-Egyptian Miscellanies*, London.

Gasperini, V.

2014 “Mycenaean and Cypriot Pottery from Gurob in the Manchester Museum Collection: A test of Trade Network Theories for the New Kingdom Fayum”, *Journal of Ancient Egyptian Interconnections* 6/2, pp.10-22.

2016 “Goods from the Wine-Dark Sea: Typology of Imports Excavated at Zawiyet Umm El-Rakham”, in Franzmeier, H., Rehren, T. and Schluz, R. (eds.), *Mit Archäologischen Schriften Geschichte Schreiben Festschrift für Edgar B. Pusch zum 70. Geburtstag*, Hildesheim, pp.119-136.

Graefe, E.

1990 *Das Grab des Ibi, Obervermögensverwalters der Gottesgemahlin des Amun(Thebanisches Grab Nr. 36)*, Bruxelles.

Hall, H.R.

1901 *Oldest Civilization of Greece*, London.

Hankey, V.

1973 “The Aegean Deposit at el-Amarna”, in Karageorghis, V. (ed.), *Acts of International Archaeological Symposium “The Mycenaeans in the Eastern Mediterranean”*. Nicosia 27th March-2nd April 1972, Nicosia, pp.128-136 .

1981 “The Aegean Interest in El Amarna” *Journal of Mediterranean Anthropology and Archaeology* 1, pp.38-49.

1993 “Pottery as Evidence for Trade: Egypt”, Zerner, C., Zerner, P. and Winder, J., *Wace and Blegen. Pottery as evidence for trade in the Aegean Bronze Age 1939-1989. Proceedings of the international conference held at the American School of Classical Studies at Athens, December 1989*, Amsterdam, pp.101-8.

1995 “Stirrup Jars at El-Amarna”, in Davies, W. J., and Schofield, L. (eds.), *Egypt, the Aegean and the Levant: Interconnections in the Second Millennium BC*, London, pp.116-124.

1997 “Aegean Pottery at El-Amarna: Shapes and Decorated Motifs”, in Phillips, J. (ed.), *Ancient Egypt, the Aegean, and the Near East : Studies in Honour of Martha Rhoads Bell*, San Antonio, pp.193-218.

Hankey, V. and Aston, D.

1995 “Mycenaean Pottery at Saqqara: Finds from Excavation by the Egypt Exploration Society of London and the Rijksmuseum van Oudheden, Leiden. 1975-1990”, in Carter, J.B and Morris, S.P. (ed.), *The Ages of Homer: A Tribute to Emily Townsend Vermeule*, Austin, pp.67-91.

Hankey, V. and Leonard, A.

1992 *Ägypten und Levante. Ägäische Importe des 2. Jahrtausends v. Chr. Tübinger Atlas des Vorderen Orients*. BIII 4/5, Wiesbaden.

Hankey, V. and Tufnell, O.

1973 “The Tomb of Maket and Its Mycenaean Import”, *The Annual of the British School at Athens* 68, pp.103-111.

Hassler, A.

2008 “Mykenisches in Amarna. Funde der Deutschen-Orient Gesellschaft im Ägyptischen Museum Berlin”, *Ägypten und Levante* 18, pp.129-143.

2010 “Mykenische Keramik aus Verlorenen Kontexten. Die Grabung L.Loats in Gurob”, *Ägypten und Levante* 20, pp.207-225.

2015 “Mycenaean Pottery in Egypt Reconsidered: Old Contexts and New Results”, in Kousoulis, P. and Lazaridis, N. (eds.), *Proceedings of the Tenth International Congress of Egyptologists, University of the Aegean, Rhodes, 22-29 May 2008*, Leuven, pp.1989-1998.

Hassler, A. and Höflmayer, F.

2008 “Mostagedda 1874 and Gurob 23: Notes on Some Recent Radiocarbon Dates and their Importance for Egyptian Archaeology and Chronology”, *Ägypten und Levante* 18, pp.145-155.

Hein, I. and János, P.

2004 *Tell El-Dab'a XI: Areal A/V Siedlungselikte der Späten 2 Zwischenzeit*, Wien.

Hoffmeier, J.K. ed.

2014 *Excavation in North Sinai: Tell el Borg I*, Indiana.

Hoflmayer, F., Hassler, A., Kutschera, W. and Wild, E.M.

2013 “Radiocarbon Data for Aegean Pottery in Egypt: New Evidence from Saqqara(Lepsius) Tomb 16 and its Importance for LM IB / LH IIA”, in: Shortland, A.J. and Ramsey, C.B. (eds.), *Radiocarbon and the Chronologies of Ancient Egypt*, Oxford, pp.110-120.

Hornung, E., Kraus, R. and Warburton, D.A.

2006 *Ancient Egyptian Chronology*, Brill.

Judas, B.A.

2010 *Late Bronze Age Aegean Ceramics in the Nile Valley: An Analysis of Idea and Practice represented in the Archaeological Record*, Unpublished dissertation, University of Pennsylvania.

Jung, R.

2015 “Imported Mycenaean Pottery in the East: Distribution, Context and Interpretation” in Eder, B. and Pruzsinszky, R. (eds.), *Policies of Exchange: Political Systems and Modes of Interaction in the Aegean and Near East in the 2nd Millennium B.C.E.*, Vienna, pp.243-276.

Kaiser, B.

1976 *Corpus Vasorum Antiquorum Deutschland Bonn.: Akademisches Kunstmuseum Band 2*, München.

Kelder, J.M.

2010a “The Egyptian Interest in Mycenaean Greece”, *Jaarbericht “Ex Oriente Lux”* 42, pp.125-140.

2010b *The Kingdom of Mycenae: A Great Kingdom in the Late Bronze Age Aegean*, Bethesda.

Kemp, B. and Stevens, A.

2010 *Busy Lives at Amarna: Excavations in the Main City (Grid 12 and the House of Ranefer, N49.18). Volume II: The Objects*, London.

Kitchen, K.A.

1986 *The Third Intermediate Period in Egypt (1100 – 650 BC)*, Warminster.

Lacovara, P.

1988 “Reviewed Work(s): Minoan Pottery in Second Millennium Egypt by Barry J. Kemp and Robert S. Merrillees” *Journal of Near Eastern Studies* 47/4, pp.304-307.

Leonard Jr., A.

1981 “Considerations of Morphological Variation in the Mycenaean Pottery from the Southeastern Mediterranean”, *The Bulletin of the American Schools of Oriental Research* 241, pp.87-101.

1994 *An Index to the Late Bronze Age Aegean Pottery from Syria-Palestine*, Jonsred.

Loat, W.L.S.

1905 *Gurob*, London.

Maciver, D.R. and Woolley, C.L.

1911 *Buhen. Text*, Philadelphia.

Manning, S.W.

2010 “2.Chronology and Terminology”, in Cline, E.H. (ed.), *The Oxford Handbook of the Bronze age Aegean*, Oxford, pp.11-30.

Merrillees, R.S.

1973 “Mycenaean Pottery from the Time of Akhenaten in Egypt”, Karageorghis, V. (ed.), *Acts of the International Archaeological Symposium, 'The Mycenaeans in the Eastern Mediterranean', Nicosia, 27th March to 2nd April, 1972*, Nicosia.

Merrillees, R.S and Winter, J.

- 1972 “Bronze Age Trade between the Aegean and Egypt: Minoan and Mycenaean Pottery from Egypt in Brooklyn”, *Miscellanea Wilbouriana* 1, pp.101-134.

Mielle, L.

- 2016 “18th Dynasty Pottery from Gism el-Arba (Sudanese Nubia)”, in Bader, B., Knoblauch, C.M. and Köhler, C. (eds.), *Vienna 2 – Ancient Egyptian Ceramics in the 21st Century. Proceedings of the International Conference held at the University of Vienna, 14th-18th of May, 2012*, Leuven, pp.423-433.

Minault-Gout, A. and Thill, F.

- 2012 *Saï II: Le Cimetière des Tombes Hypogées du Nouvel Empire*, Le Caire.

Mommsen, H., Beier, T., Diehl, U. and Podzuweit, Ch.

- 1992 “Provenance Determination of Mycenaean Sherds found in Tell el Amarna by Neutron Activation Analysis”, *Journal of Archaeological Science* 19, pp.295-302.

Moran, W.

- 1992 *The Amarna Letters*, Baltimore and London.

Mountjoy, P.A.

- 1986 *Mycenaean Decorated Pottery: A Guide to Identification*, Göthenburg.
2007 *The Johann Wolfgang Goethe University Collections: The Mycenaean and the Minoan Pottery*, Wiesbaden.

Mountjoy, P.A. and Mommsen, H.

- 2001 “Mycenaean Pottery from Qantir-Piramesse, Egypt”, *The Annual of the British School at Athens* 96, pp.123-55.

Mühlenbruch, T

- 2010 “Eine Mykenische Bügelkanne aus Ägypten in Marburg und ihre Implikationen für den Handel zwischen Südgriechenland und dem östlichen Mittelmeerraum in SH III B2”, *Ägypten und Levante* 20, pp.357-361.

Nagel, G.

- 1938 *La Céramique du Nouvel Empire à Deir el Médineh*, Le Caire.

Oren, E.D.

- 1987 “The “Ways of Horus” in North Sinai”, in Rainey, A.F. (ed.), *Egypt, Israel, Sinai: Archaeological and Historical Relationships in the Biblical Period*, Jerusalem, pp.69-119.

Papadimitriou, N.

- 2013 “Regional or 'International' Networks? A Comparative Examination of Aegean and Cypriot Imported Pottery in the Eastern Mediterranean”, *Talanta* 44, pp.92-136.
2015 “Aegean and Cypriot Ceramic Trade Overseas during the 2nd Millennium BCE”, in Mynářová, J., Onderka, P. and Pavúk, P. (eds.), *There and Back Again – the Crossroads II. Proceedings of an International Conference Held in Prague, September 15-18, 2014*, Praha, pp.423-445.

Pendlebury, J.D.S.

- 1930 *Aegyptiaca: A Catalogue of Egyptian Objects in the Aegean Area*, Cambridge.
1951 *The City of Akhenaten. Part III. Vol.1, 2*, London.

Petrie, W.M.F.

- 1890a *Kahun, Gurob and Hawara*, London.
1890b “The Egyptian Bases of Greek History”, *The Journal of Hellenic Studies* 11, pp.271-277.
1891 *Illahun, Kahun and Gurob*, London.
1894 *Tell el Amarna*, Warminster.
1906 *Hyksos and Israelite Cities*, London.
1907 *Gizeh and Rifeh*, London.
1909 *The Palace of Apries (Memphis II)*, London.

Petrie, W.M.F. and Brunton, B.

- 1924 *Sedment II*, London.
 Petrie, W.M.F. and Quibell, J.E.
- 1985 *Naqada and Ballas*, London.
 Picton, J., and Pridden, I, (eds.)
- 2008 *Unseen Images. Archive Photographs in the Petrie Museum*, London.
 von Pilgrim, C., Müller, W. and Werlen, L.
- 2011 “The Town of Syene. Report on the 8th Season in Aswan”, *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts Abteilung Kairo* 67, pp.125-161.
 Redford, D.B.
- 2004 *Excavation at Mendes: Vol. I The Royal Necropolis*, Leiden and Boston.
 Reeves, N. and Taylor, J.H.
- 1992 *Howard Carter before Tutankhamun*, London.
 Robinson, D.M. and Harcum, C.G.
- 1930 *A Catalogue of Greek Vases in the Royal Ontario Museum of Archaeology Toronto: Volume I*, Toronto.
 Schreiber, G.
- 2008 *The Mortuary Monument of Djehutymes II: Finds from the New Kingdom to the Twenty-sixth Dynasty*, Budapest.
 Shaw, I. and Hagen, F.
- 2014 *Report to the Supreme Council of Antiquities on a study-season at the Kom Aushim magazine, Fayum, working on the finds from the Liverpool/Copenhagen/UCL Gurob Harem Palace Project, 11-20 November 2014*, <http://gurob.org.uk/reports/>, 2016 年 9 月 18 日閲覧
- Smith, S.T.
- 1995 *Askut in Nubia: The Economics and Ideology of Egyptian Imperialism in the Second Millennium B.C.*, London and New York.
- 2003 *Wretched Kush: Ethnic Identities and Boundaries in Egypt's Nubian Empire*, London and New York.
 Snape, S.R.
- 2003 “Zawiyet Umm el-Rakham and Egyptian Foreign Trade in the 13th Century B.C”, in Stampolidis, N.C. and Karageorghis, V. (eds.), *Ploes: Sea Routes. Interconnection in the Mediterranean, 16th-6th c.BC. Proceeding of the International Symposium Held at Rethymnon, Crete, September 29th-October 2nd, 2002*, Athens, pp.63-70.
 Snape, S.R., and Wilson, P.
- 2007 *Zawiyet Umm el-Rakham I*, Bolton.
 Spencer, N.
- 2008 *Kom Firin I: The Ramesside Temple and the Site Survey*, London.
 Spencer, P.
- 2002 *Amara West II: The Cemetery and the Pottery Corpus*, London.
 Steindorff, G
- 1937 *Aniba*, Glückstadt.
 Stevens, A.
- 2012 *Akhenaten's Workers: The Amarna Stone Village Survey, 2005-2009. Volume II: The Faunal and Botanical Remains, and Objects*, London.
 Strudwick, N.
- 1996 *The Tomb of Amenhotep, Khnummose, and Amenmose at Thebes*, Oxford.
 Stubbings, F.H.
- 1951 *Mycenaean Pottery from the Levant*, Cambridge.
 Vercoutter, J.

- 1997 “Égyptiens et Préhellènes. Nouveaux Points de Vue”, in Phillips, J. (ed.), *Ancient Egypt, the Aegean, and the Near East: Studies in Honour of Martha Rhoads Bell*, San Antonio, pp.463-470.
- Vermeule, E.
- 1964 *Greece in the Bronze Age*, London.
- 1982 “Egyptian Imitations of Aegean Vases.” in Freed, R. (ed.), *Egypt's Golden Age: The Art of Living in the New Kingdom 1558-1085 B.C.*, Boston, pp.152-158.
- Vermeule, E. and Karageorghis, V.
- 1982 *Mycenaean Pictorial Vase Painting*, Cambridge.
- Wace, A.J.B and Blegen, C.W.
- 1939 “Pottery as Evidence for Trade and Colonisation in the Aegean Bronze Age”, *Klio: Beiträge zur Alten Geschichte* 32, pp.131-147.
- Wainwright, G.A.
- 1920 *Balabish*, London.
- Warren, P. and Hankey, V.
- 1989 *Aegean Bronze Age Chronology*, Paris.
- White, D.
- 2002 *Marsa Matruh II: The Objects*, Philadelphia.
- Wijngaarden, G.J.
- 2002 *Use and Appreciation of Mycenaean Pottery in the Levant, Cyprus and Italy (ca. 1600-1200 BC)*, Amsterdam.
- 2011 “Tokens of Special Relationship? Mycenaean and Egyptians” in Duistermaat, K. and Regulski, I. (eds.), *Intercultural Contacts in the Ancient Mediterranean, Proceedings of the International Conference at the Netherlands-Flemish Institute in Cairo, 25th to 29th October 2008*, Leuven, pp.225-251.
- Willson, P.
- 2011 *Sais I: The Ramesside – Third Intermediate Period at Kom Rebwa*, London.
- Wodzińska, A.
- 2015 “2. Tell el Retaba 2014, Pottery Material”, in Rzepka, S., Hudec, J., Jarmužek, Ł., Dubcová, V., Hulková, L., Odler, M., Wodzińska, A., Trzciński, J., Šefčáková, A., Sójka, P., Fulajtár, E., Černý, M. and Tirpák, J. “From Hyksos Settlers to Ottoman Pipe Smokers. Tell el-Retaba 2014”, *Ägypten und Levante* 25, pp.97-166.
- Woolley, C.L. and Maciver, D.R.
- 1910 *Karanòg : the Romano-Nubian cemetery vol. I, 2*, Philadelphia.
- Yasur-Landau, A., Gross, B., Gadot, Y., Oeming, M and Lipschits, O.
- 2014 “A Rare Cypriot Krater of the White Slip II Style from Azekah”, *Israel Exploration Journal* 64/1, pp.1-8.
- Yon, M., Karageorghis, V. and Hirshfeld, N.
- 2000 *Céramiques Mycéniennes d' Ougarit*, Nicosie.
- Yoshimura, S. and Hasegawa, S.
- 2000 “New Kingdom Necropolis at Dahshur – The Tomb of Ipay and Its Vicinity”, in Bárta, M. and Krejčí, J., (eds.), *Abusir and Saqqara in the Year 2000*, Prague, pp.145-160.
- 斎藤正憲
- 1999 「エジプト新王国時代における土器のアセンブリッジ」『早稲田大学大学院文学研究科紀要 第4分冊 日本史・東洋史・西洋史・考古学』第45号、早稲田大学大学院文学研究科、pp.101-112.
- 牧野久美
- 2004 「ミケーネ土器」『古代オリエント事典』岩波書店、p.759.
- 吉村作治、近藤二郎、矢澤 健、柏木裕之、秋山淑子
- 2011 「III. 第15次調査概要」『ダハシュール北遺跡第14次・15次調査概報 エジプト学研究 別冊第15号』早稲田

大学エジプト学会、pp.61-83.

吉村作治、矢澤 健、近藤二郎、西本真一

2013 「エジプト ダハシュール北遺跡発掘調査報告-第18次発掘調査-」『エジプト学研究第19号』早稲田大学エジプト学会、pp.15-42.

吉村作治、矢澤 健、近藤二郎、柏木裕之、竹野内恵太、山崎世理愛

2016 「エジプト ダハシュール北遺跡調査報告-第22次調査-」『エジプト学研究第22号』日本エジプト学会、pp.91-112.

表 4 各遺跡で出土したミケーネ土器の出典
Table.4 List of Publication

遺跡名	出典
1. Zawiyet umm el-Rakham	Snape 2003, p.67, fig.4, 6; Snape and Willson 2007, pp.58-9, fig.3:22, 24
2. Marsa Matruh	White 2002b, pp.6-7
3. Tell Hebwa	Aston 1996, p.186, tafel.11:45
4. Tell el-Borg	Hoffmeier ed. 2014, p.498, chap.11 pl.1:1-3, 5-9, pl.2:1-9
5. C86	Hankey and Leonard 1992; Hankey 1993, p.113
6. Bir el-Abd	Oren 1987, p.78; Hankey and Leonard 1992; Hankey 1993, p.113
7. El-Arish	Stubblings 1951, p.94; Hankey and Leonard 1992
8. Kom Firin	Buchholz 1974, p.442; Spencer 2008, p.15
9. Sais	Willson 2011, p.178
10. Mendes	Redford 2004, p.142, pl.T:42
11. Qantir	Mountjoy and Mommsen 2001, pp.139-154, fig.1:1-20, fig.2:21-45, fig.3:46-64, fig.4:68-82
12. Tell el-Daba	Bietak 1975, p.208; Kelder 2009, p.342
13. Tell el-Miqdam	Vermeule and Karageorghis 1982, p.42, 201:V24
14. Mostai	Stubblings 1951, p.98
15. Kom abu-Billo	Hankey and Leonard 1992
16. Zagazig	Hankey and Leonard 1992
17. Tell el-Retabeh	Petrie 1906, pl.xxxvi:5, 7-9, 14
18. Heliopolis	Stubblings 1951, p.93
19. Abusir	von Bissing 1899, p.57, fig.1; Edgar 1911, p.1, pl.1; Stubblings 1951, p.56,
20. Memphis	Anthes 1959, p.33:114, p.34:118; Anthes 1965, p.159:631; Petrie 1909, pl.19c:118
21. Saqqara	Firth and Gunn 1926, pl.42:D; Stubblings 1951, p.99; Bourriau and Aston 1985, pl.37:97-98; Zivie 1990, fig.89-90; Hankey and Aston 1995, fig.4:1-25; Aston 1997, pl.121:166-169; Aston and Aston. 2001, pl.37:7, 42:86; Aston 2001, pl.51:63-64; Bourriau et al. 2005, fig.37:184,188-189, 38:185-187,190; Aston 2005, pl.126:126a-b; Raven 2011, pp.226-227,229, 234, fig.iv.15:138, 19:163-166, Aston 2012, fig.vii.54:390-393; French 2013, fig.98:e-m; Dunsmore 2014, 9, 291:141; Hassler 2015, fig.5
22. Dahshur	Yoshimura and Hasegawa 2000, fig.11:1; 吉村他 2011, p.82, fig.50:8; 吉村他 2013, p.33, fig.17:5; 吉村他 2016, p.108, fig.19:8
23. Tarkhan	Picton and Pridden 2008, p.269:3657, p.275:3776
24. Riqqeh	Engelbach 1915, pl.xxii:2-5; Stubblings 1951, p.97
25. Meidum	Wijngaarden 2002, p.328
26. Lahun	Petrie 1891, pl.xxvi:44; Stubblings 1951, p.56
27. Gurob	Petrie 1890, pp.42-43, pl.28:1, 7, 10, 17; Petrie 1891, pl.17:28, pl.19:37, pl.20:7, 9; Loat 1905, pl.17:5; Forsdyke 1925, p.181, fig.251-252, 254, 258; Brunton and Engelbach 1927 pl.28:17, pl.29:15, 39, pl.39:97A; Robinson and Harcum 1930, pp.21-22; Stubblings 1951, pp.94-95; Bell 1991, pl.7, pl.9-14; Judas 2010, fig.1:45; Hankey 1993; Hassler 2010; Mühlenbruch 2010; Gasperini 2014, pp.13-14, fig.4
28. Sedment	Petrie and Brunton 1924, pl.59:5, 6, 12, pl.65:97C; Stubblings 1951, p.93
29. Zawiyet el- Amwat	Stubblings 1951, p.93
30. El- Ashmunein	Hankey and Leonard 1992
31. El-Amarna	Petrie 1984, pl.26-30; Forsdyke 1925, fig.261, 268-269; Frankfort and Pendlebury 1933, pl.45, Pendlebury 1951, pl.78:9, pl.109; Catling et al. 1963, p.94 ,pl.33b; Merrillees and Winter 1972, fig.7-26; Kaiser 1976, taf.26-28; Reeves and Taylor 1992, p.37; Hankey 1997; Freed and Markowitz 1999, pp.242-243; Åström and Anson 2007, p.48, pl.2-3; Hassler 2008, taf.1-3; Mountjoy 2008, pp.63, 73, 75-76; Judas 2010, fig.1; Kemp and Stevens 2010b, pp.53-54; http://petriecat.museums.ucl.ac.uk
32. Asyut	Stubblings 1951, p.98
33. Rifeh	Petrie 1907, pl.23:42, 55, pl.27; Stubblings 1951, p.96
34. Abydos	Ayrton et al. 1904, pl.58:11; Stubblings 1951, pp.93, 97-98
35. Balabisch	Wainwright 1920, pl.25:83-86; Stubblings 1951, p.98
36. Deir el-Ballas	Hankey and Leonard 1992
37. Naqada	Petrie and Quibell 1895, p.69; Stubblings 1951, p.99

表4 各遺跡で出土したミケーネ土器の出典

Table.4 List of Publication

遺跡名	出典
38. Thebes	von Bissing 1899, p.57; Hall 1901, fig.28; Edgar 1911, p.3; Davies 1913, pl.41; Nagel 1938, p.9:6, p.51:g, fig.5:6a-c; Stubbings 1951, p.93; Kaiser 1976, p.120, pl.40:6; Bell 1982, pp.154, 156, fig.1-3; Graefe 1990, abb.70:165; Hankey and Leonard 1992; Hankey 1993, p.114, Strudwick 1996, p.171, pl.16:A; Bavay 2004, fig.1; Schreiber 2008, pl.31:28
39. Edfu	Hankey and Leonard 1992
40. Aswan	Pendlebury 1930, p.112
41. Arabi Hilla	Firth 1927, p.187
42. Daqqa	Wijngaarden 2002, p.328
43. Quban	Hankey 1993, p.114
44. Aniba	Steindorff 1937, pp.139-141, pl.86,89
45. Arminna	Wijngaarden 2002, p.328
46. Buhen	Woolley and Maciver 1910, p.132, pl.48:XXLI-SXLII; Emery 1979, p.185, pl.77:C-F
47. Askut	Smith 1995, p.161, fig.6:16A-D
48. Amara West	Spencer 2008, p.38-39, pl.56-57
49. Sai	Vercoutter 1997, fig.2; Minault-Gout and Thill 2012, pl.145-T21 61; Budka 2013
50. Sesebi	Merrillees and Winter 1972, fig.27-34, Hankey 1993, p.114
51. Tombos	Smith 2003, p.152, fig.6:21
52. Tabo	Hankey 1993, p.114
53. Kerma	Lacovara 1988
54. Gism el-Arba	Mielle 2016, pl.1
Provenance not known	Furtwängler and Loeschcke 1886, p.31; Edgar 1911, pp.2-4, pl.1; Robinson and Harcum 1930, pp.22-24; Wace and Blegen 1939, pp.145-146; Stubbings 1951, pp.58, 99; Vermeule 1964, taf.45; Merrillees and Winter 1972; Buchholz 1974, p.457; Kaiser 1976, taf.25:3-4, 30:5; Vermeule 1982, p.155:162, p.156:165; Donadoni et al. 1993, pp.146-147

エジプト学研究 第24号

2018年3月31日発行

発行所 / 日本エジプト学会

〒169-8050 東京都新宿区戸塚町1-104

早稲田大学エジプト学研究所内

発行人 / 吉村作治

The Journal of Egyptian Studies No.24

Published date: 31 March 2018

Published by The Japan Society of Egyptologist

1-104, Totsuka-cho, Shinjyuku-ku, Tokyo, 169-8050, Japan

© The Japan Society of Egyptologist